

日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2026.7 vol.23

発行:令和8年7月15日
日本音楽教育メディア学会事務局
〒125-0062 葛飾区青戸 5-5-16
jmsmeoffice@gmail.com
ホームページ
<https://jmsme.org/>

ご挨拶

会長 飯泉祐美子



早いもので今年も折り返しを迎えました。

会員の皆様におかれましては、それぞれの教育・研究・実践の場で充実した日々をお過ごしのことと存じます。

日頃より日本音楽教育メディア学会の活動にご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

近年、生成AIの進歩は目覚ましく、教育現場でも日常的に活用されるようになりました。資料作成や情報検索、文章の要約など、多くの作業が短時間でできるようになり、学びや研究の効率化は確実に進んでいます。私自身も、その利便性を実感する一人です。今後、生成AIは、教育を支える重要なパートナーとなっていくことでしょう。

一方で、教育に携わる者として、効率化の陰で見過ごしではない変化も感じています。私の担当する授業では、毎時間、その日の学びや考えたことを自分の言葉で書き表す時間を設けています。学生は一生懸命に書こうとするのですが、近年、漢字が思うように書けなかったり、まとまった文章を組み立てることに苦労したりする姿を目にする機会が増えました。

これからの時代は、AIと共存する時代だからこそ、自ら考え、言葉を選び、表現するという過程が、これまで以上に重要になってくると思います。効率化によって生まれた時間を、より深く考え、感じ、表現するために使うことこそ、教育の価値であるように思います。こうした変化は制度面にも表れています。

先月10日の日本経済新聞では「デジタル教科書、2030年度使用へ改正法成立 教員の活用力問われる」と報じられました。

今後の教科書は「紙」「デジタル」、学習内容を紙とデジタルに分けて掲載する「ハイブリッド」の3種類となるようですが、その頃、教育現場はどのように変わっているのでしょうか。さらに、その先の2036年には、子どもたちはどのような学びの中で育っているのでしょうか。

このように時代が変容しても、音楽教育や表現教育の本質は変わらないのではないのでしょうか。一人ひとりが感じたことを音や身体、言葉を通して表現する営みの中には、感性や創造性、他者への共感など、人が人として育つために欠かすことのできない学びがあります。AIは多くの答えや選択肢を示してくれます。しかし、音楽教育が育てるのは、答えを探すことだけではなく、自ら問いを立て、感じ、考え、表現する力です。

だからこそ、これからの時代には、心を育てる教育をより一層大切にしていきたいと思います。

日本音楽教育メディア学会は、メディアの進化を積極的に受け止めながらも、その先にある「人の育ち」を見据え、予測困難な未来を生きる子どもたちの豊かな情操と表現力を育む音楽・表現教育の在り方を、会員の皆様とともに探究し、社会へ発信してまいります。

今後とも、本学会へのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



日本音楽教育メディア学会第13回総会 第23回研究会のご案内

日時：2026年8月10日（月）

場所：葛飾シンフォニーヒルズ 別館 2階 ビジュアルルーム

総会 13:00～

研究会 口頭発表 14:00～

14:45～15:45 アフタヌーンティー 

（お茶を飲みながらお話ししませんか？）

会場とオンライン（Zoom）でのハイブリッド開催となります

参加費：会員無料 非会員 1,000円（事務局に参加お申し込みください）

16:30～ 情報交換会（青砥駅周辺予定）

事務局：jmsmeoffice@gmail.com



【口頭発表】（発表20分、質疑応答10分）

14:00 「文部省唱歌『虫のこえ』を使った授業について」

（飯泉琴都 帝京科学大学）

（飯泉祐美子 帝京科学大学）

【アフタヌーンティー】 14:45～15:45



会費納入のお願い

2025年度（2025年8月1日～2026年7月31日）
の年会費を納入をされていない方はよろしくお願い致します。

《振込先》 ゆうちょ銀行 10510-91267401



他銀行よりお振込みいただく場合：

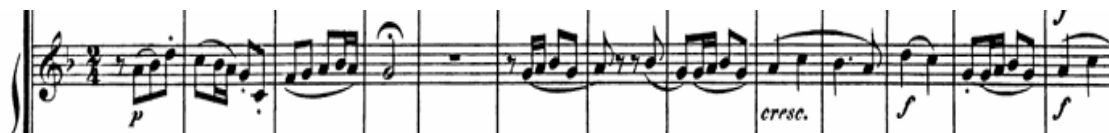
店名〇五八（読みゼロゴウハチ）店番058（普）9126740
ニホンオンガクキョウイクメディアガッカイ

Column 連載「24の調性に隠された情感」 第5回 森永美穂子（武蔵野音楽大学）

前回のイ長調に続いて、今回はヘ長調を取り上げる。題材にしているシューマンの『ユーゲントアルバム』op.68では、初回に取り上げたハ長調が6曲、前回のイ短調が8曲、イ長調は7曲、そして今回のヘ長調は6曲ある。

ヘ長調の一般的な概念としては、以下のベートーヴェンの作品が代表的であろう。

ベートーヴェン 交響曲第6番「田園」 op.68



ベートーヴェン ヴァイオリンソナタ「春」 op.24



ベートーヴェン ピアノソナタ op.10-2



田園の風景と春の訪れが重なり、ほのぼのとした暖かい情景が目に浮かぶ。鳥たちの嬉しいさえずりが、パッセージとなって駆け上っていくようである。

それでは、シューマンでは、それらはどのように取り扱われているのだろうか。

「狩りの歌」では、中音域のユニゾンが、6/8拍子の中で弾むように上り下りする。喜びや期待を全員で予感するような音楽となっている。

第7番「狩人の歌」



子どもの頃に一度は弾いたり聴いたりしているであろう「楽しき農夫」では、伴奏の形が軽やかさを表現し、うきうきする気持ちを共感できる。そして、どちらの曲にも Frisch(元気に、はつらつとした)と書かれていることにも注目したい。

第10番「楽しき農夫」



さて、ここから後の第 26 番と第 30 番には題名がついていない。楽譜から捉えられることには、第 26 番の冒頭にある Nicht schnell, hübsch vorzutragen(速くなく、可愛らしく表現して)という言葉が解釈の決め手になるだろう。伴奏形が「楽しき農夫」に通じるところも特徴だ。だが、第 30 番では、それは全く違う表現となり、ゆっくりと穏やかな祈りのような旋律が続く。

第 26 番 無題



第 30 番 無題



そして第 41 番「ノルウェーの歌」では、重々しい民謡的な和声の進行、第 42 番「装飾されたコラルール」では再び美しい流れを連想させる。



《会員メッセージ》

八代健志

70 歳を迎え、遂に無職老人となりました。この上思うことは、ただただ若い人たちの邪魔になりたくない、という事だけです。そこで、お説教や大演説にならぬよう注意しながら、この十年ほど思っていた、素材と媒体のお話をします。

デューイの芸術教育論に近い記述があったのですが、“素材（音・かたち・色等）があって、それを目的を持って使うと媒体になる”といわれているところ。自分は音楽科において、個々の児童に対し、真にくボクはこれらの素材を使って伝えたいよお、と、思える「目的」を、正しく個の“内側”から発するものとして尊重できていなかったな、と反省しています。

子どもたちが魅力を感じた、彼らの生活の中にある音楽（サウンドスケープで聴く音なども含め）を、すべて音楽科教員が虚心に受け入れ、一旦そのまま子どもたちに価値づけを委ね、その価値づけのプロセスにきちんと指導者のサポートを入れる形で、上に言う「『目的』を子どもたちの内側にしっかりと持たせ」れば良かったなあと思っています。「それを聴いてみて、キミはどうだったの？」と優しく、構えずに尋ねてやれば良いのに……、と半世紀前の、センスになりたての自分に諭してやりたいです。

さて、退会間近に、こうして書かせて頂いたお陰で、10 年以上お世話になった本学会の皆さまに親しくお礼が申せます。長い間ジジイの相手をして下さり有難うございました。感謝の裡に退場します。

《新入会員メッセージ》

山口亜弥子（鶴見大学短期大学部）

はじめまして。このたび自己紹介の機会をいただきました山口亜弥子と申します。

私は現在、大学で幼児教育・保育を学ぶ学生を対象に音楽教育の授業を担当しているほか、小学校での音楽指導、合唱団や演奏会での伴奏など、教育と演奏の両方に携わっています。教育現場と演奏現場を行き来する中で、「授業で本当に役立つことは何か」「学びやすい環境とはどのようなものか」を日々考えながら活動しています。

研究では、ICT を活用した音楽教育に関心を持っています。学校現場で広く利用されているロイロノートを用いた音楽科授業の実践をはじめ、遠隔授業による音楽教育について研究しています。デジタル技術を取り入れた学びの可能性を探るとともに、実践の中で見えてくる課題についても検討しています。ICT は日々進化していますが、「どのように活用すれば子どもたちの学びがより豊かになるか」が何より大切だと感じています。現場での実践と研究を往復しながら、その可能性を探り続けたいと考えています。

学会には、さまざまな立場の先生方や実践者の皆さまが集まっておられます。私自身も多くのことを学ばせていただきながら、教育現場での実践や研究成果を共有し、活発な意見交換ができれば幸いです。

どうぞよろしくお願いいたします。

「むすんでひらいて」の日本への伝来とその変遷

「むすんでひらいて」は、現在では幼児教育や小学校音楽で親しまれている代表的な唱歌である。しかし、この旋律はもともと日本で作られたものではなく、18世紀フランスの思想家であり音楽家のジャン＝ジャック・ルソーが作曲したオペラの一節を起源としている。

この旋律は当時のヨーロッパでは各地に広まり、19世紀には賛美歌の旋律としても用いられるようになっていた。

日本へは明治初期、当時の政府は近代国家づくりの一環として学校教育制度を整備していたが、その際に教科として位置づけられた「唱歌」の西洋音楽の教材として日本語歌詞がつけられ採択されたのが「みわたせば」である。

（歌詞）

見渡せば 遠き近き 野辺の景色
霞みわたり 春の光 のどかなり
花は咲き 鳥は歌い 風はそよぐ
心楽しき 今日の眺め うるわしや



この唱歌は現在の「むすんでひらいて」と同じ旋律だが、歌詞の内容はまったく異なり、手遊びではなく、春の野山の景色を歌う唱歌として作られている。

当時は、多くの欧米の民謡や賛美歌、クラシック音楽の旋律に日本語の歌詞を付けた。

蛍の光（スコットランド民謡）
蝶々（ドイツ民謡）
庭の千草（アイルランド民謡）
埴生の宿（イギリス歌曲）
故郷の空（スコットランド民謡）
久しき昔（スコットランド民謡）」



これらがその代表的なものである。これを機にこれらの楽曲についても今後連載していく。

会員掲示板

ケンプの流れを受け継ぐ

ピアニスト、A.v.アルニム氏が
昨年に引き続き、来日します。

ベートヴェンピアノソナタ

第4、5、6、7番を

公開レッスン方式で解説！

演奏法だけでなく、各曲に

まつわるお話も満載！

1曲を 60 分講義して頂きます

ので長い講座となりますが、

1曲だけの受講も可能です。

是非、王道のベートーヴェンを

味わってみて下さい。

（森永美穂子先生より）

A. von Arnim
Beecham

2026年11月15日(日)
12:00開演 13:30開場
加賀町ホール
チケット ¥8,000

公開講座プログラム

- 12:00～ Op.7 原谷真子
（武蔵野音楽大学附属音楽教室非常勤講師）
- 13:10～ Op.10-1 森永美穂子
（武蔵野音楽大学非常勤講師）
- 15:00～ Op.10-2 古川真子
（武蔵野音楽大学附属音楽教室非常勤講師）
- 16:00～ Op.10-3 橋本多恵子
（埼玉県立松戸高等学校音楽科ピアノ科非常勤講師）

講師：子安やかり（武蔵野音楽大学専任教授）（元）

お問い合わせ
A. von Arnim 公開講座運営委員会 0468.amin@gmail.com
協力：ピアノ練習室のば（ステーション） ピアノWebサイトよりクレジットカード
決済にてお申込みが可能です。なお、受講料とは別に2026年のシステム使
用料が発生します。各曲ごとのチケットは¥3,000にて取り扱い中。

事務局だより

FIFA の熱戦の最中、森保監督は「君が代」で涙を流した。それを見ていた一部の人が揶揄し、監督本人が反論したという。実はこれまで、外国人が「君が代」の意味に涙したという話題もあった。

世界の多くの国歌は、「戦争や革命での勝利」を歌っているが、「君が代」は、「あなたの人生がずっと長く続きますように」とか、「長い間平和が続きますように」という、戦いの歌ではなく、誰かの幸せを願う祈りの歌だと言うのだ。「君が代」の話題を聞いたときに「君が代」は大事な「入口」の一つだ。

小中学生に、伝統的な音楽と出会わせるとき、いつも、子どもなりの「入口」をどう用意するか考える。（ま）